

体育・スポーツの存在価値を探る

＝逞しい生きざま－その心と体への貢献＝

田中純二¹⁾

A Study on the Existing Value of Physical Education and Sports

A Vigorous Life – its Contribution to the mind and body.

Junji Tanaka ¹⁾

Abstract

There are various recognitions about the role of physical education and sports. The purpose of this study was to set up a theory concerning the contribution of the training for physical education and sports to build up vigorous mind and body, considering the existing value relating to the view of life reflected by brain works

A figure of three steps to the vigorous life : enjoyable - skillful - vigorous was designed, and examined contents and procedures, respectively. The training steps were studied to get the vigorousness. Leaders of physical education and sports should always study the educational care and skills of communication, and should practice the good teaching and learning.

As a result the value of physical education and sports will be highly appraised on the point of view that contributed to the human education for the vigorous life.

Key words : the third aspect of life, confidence for accomplishment, the enjoyable way to vigorousness, good leaders

キーワード：第三の生きざま 効力感 楽しさから逞しさへの道 良い指導者

I. はじめに

体育とは何か、スポーツとは何か、健康とは何かについての、世の中の関心や認識が広がりを見せてきたことは、体育スポーツにたずさわる者にとって大変歓迎すべきことである。世の関心事になりつつあるということは、今まで体育・スポーツ界のみで解釈してきた体育・スポーツの競技や一般的な健康と運動等の、在り方や考え方が問われ続けられるようになって来たことであろう。それは急速に変革しつつある現代社会において、体育・スポーツ界以外の人々が体育・スポーツの存在価値をどのように受け止めているかという問

題となってくるのである。

例えば大学における一般体育も、数年来の大学改革の過程でさまざまな議論がなされ、現在各大学の中で各々異なった位置づけにあるのが現状である。この大学改革時における本学体育の検討に当たって筆者は当初より関わってきた。その中で大学の学問や生きる力にとって体育・スポーツが果たす役割について専門家として発言し、おおかたの理解を得たことでスポーツ・健康科学としての存続が認められ、新しい在り方を摸索しつつあるのが現状である¹⁾。

しかし問題は今後とも、ひとり大学の体育・スポーツのみならず、小・中・高をはじめ広く一般の人々に対しても、体育・スポーツの存在価値を主張し、納得のいく説明をなし得るかということ、命題とし続けなければならない。そのためには今暫くの間多角的に

1) 愛媛大学教育学部
〒790 愛媛県松山市文京町3番

1. Faculty of Education, Ehime University,
Bunkyo-cho, 3, Matsuyama-shi, Ehime, 〒790,
Japan

多くの議論があって然るべきであろう。以上のことを踏まえながら筆者は、まず健康度や志向レベル（競技レベル・同好レベル・多志向レベルなど）が異なっても、全てに共通して納得される、体育・スポーツのねらいと価値の論理を構築すべきであると考えてきた。

このような意味から、今回筆者の関わってきた長年の研究・教育の論理と、それを踏まえた指導実践からの認識に基づき、全ての人々に共通する問題として、以下の2点を取り上げ論述論考を試み、体育・スポーツのねらいや存在的価値を主張し得る一助としようとするものである。

(1) 番目には体育・スポーツの根源的なねらいである逞しく生きていく人間教育のためには、生きざまとの関わりを探ってみる必要がある。

大学正課体育実技・理論においても、リハビリ体育コースにおいても、本学サッカー部や日本の少年サッカーの指導育成においても、また、本県の体育協会の普及・強化においても、さらには一般社会人の運動のすすめにおいても、各々の生きざまに対する身体の教育、心と身体の教育の根源をつきつめてみる必要がある。

(2) 番目には、その運動やスポーツを実体験する、即ち体育・スポーツ活動現場における逞しさへの一貫した道の探究が必要であろう。

筆者は少年を初め高齢者に及ぶ多くの人々が、運動やスポーツに親しみつつ、その心と体が人生を切り開くための財産となり続けるべきだと考えている。それには、親しみながらうまくなり、そして各健康度に応じた心身の逞しさを(み)につけてほしいと願っている。この楽しさ・うまさ・逞しさの中身を、各項目について分析検証し、更に一連の流れとして捉え、感覚的のみでなく、より論理的に捉える検討が必要である。

Ⅱ. 生きざまと体育・スポーツ

体育・スポーツをどのように考えればよいのであろうか。そのためには我々の生きざまと、体育・スポーツとの関わり合いを探らねばならないだろう。それは体育・スポーツも人の営みの一つの行為に他ならないし、生きざまの一つの姿に他ならないと言う考えに立つからである。

人の生きざまについては古来、哲学から、文学から、芸術からも、そして世の多くの識者によってさまざまに論じられ続けてきている。しかし、ここでは我々の心身に関することなので、大脳生理学的立場に基づいた生きざまから論を起こして考察をすすめよう

とするものである。

猪飼²⁾の言うごとく、我々はまず「生きている」のであるが、それは大脳の構造から言う脳幹脊髄系の問題であり、ここでは生物のヒトとしての生存性を意味するに過ぎない生きざまであり、刺激に対して反応するに過ぎない生きざまなのである。

しかし、我々は大脳新皮質(新しい脳)を持っているので、そこで知性や創造性によって「よく生きていく」ことを志向しようとするのである。

現代の生き方におけるこの生存性としての身体は、医学全般の進歩と栄養学や食生活の改善によって、体格や寿命では大きくながくなり人生80年時代を迎え、かつてない高齢化の時代を迎えようとしている。一方、本当に体格に似合った体力の中身があるのかどうか、伸びた寿命が自己実現のために真に生かされているのかどうかは疑問である。

知的な面でも知識教育に優れた我が国の学校教育と、現代の豊かな情報伝達手段によって更に大きく進歩しつつある。但し反面、ここでも知識の詰め込みに終って、知性を誇るにふさわしい人間の行動が、創造性の教育と結びついていないことがしばしば論議されるのである。更にこの生存性としての身体と知性を結びつける「心のあり方」となると、多くの人々はおぼつかない答しか持ち合わせ得ないことを強く感じているのではあるまいか。

我国では体育・スポーツをすればスポーツマンシップが身につくと言う教科書風概念が一般的に先行し過ぎていて、オリンピック選手が禁止品を持ち帰るがごとき不祥事や、その他スポーツマンとしての常識を疑われるような不名誉な言動などが起きると我々は困惑する以外になす術を知らないのである。今や教育の大問題である“いじめ”にしても、この体と知識をつなぐべき心のあり方に問題が潜んでいるように思われてならない。

現代生活では只でさえいたるところに未成熟の事故が転がっているのである。その上に子供なりに他人を思い遣る心が不足し、生命にかかわる顕在危険を感じる風もなく、いわんや潜在危険への予測などまったく意に介さない風潮にある。すなわち身体の生理的限界から引き起こされる危険な兆候を見過ごし、また異常なまでの精神的圧迫を与えて平然としているが如きである。これは人間の命にかかわる心と体の一面からではあるが、正常な不安感や恐れを持つべき、心身の教育の欠如であると言って過言ではあるまい。

さて、この体と知性を結びつける「心」として登場するのが、古い脳といわれる間脳と大脳辺縁系である。それは人間の意欲の座であり、また名を「情動

脳」と呼ばれ、意志のエネルギーの源泉でもある。その醸し出す生きざまの特性は「逞しく生きていく」ことなのである。この生きざまは上述の「生きている」を第一の生きざまとし、「よく生きていく」を第二の生きざまとすれば、まさに第三の生きざまであり我々が体育・スポーツを通してねらいとする生きざまなのである。

増山³⁾によれば人間の基本情動は、喜び、驚き、恐れ、怒り、苦しみ、悲しみ、憎しみ、軽蔑、などであると言われている。これらの情動が最高度に興奮したままの流れになってしまってはならないが、人間はこのような情動の根源的なものが意欲となってさまざまな行動を起こして行くのであろう。このように考えると意欲とは英知や理知などより以前のものであろう。

この意欲にトレーニングを加えて意志のエネルギーとするため情動のトレーニングこそ必要なのである。猪飼⁴⁾は「情動のトレーニングが醸し出す特性は「道徳性」と言うことができよう」と述べている。これらの情動のトレーニングに際しての必須の条件は「体得の姿勢」と言うことである。意志のエネルギーとは自らが方向を探り、決断し、実行することである。意志力の遂行により、ことに当たっての余裕の心が生まれ、大脳皮質からの情動の制御の仕方を体得し、次第に洗練されていくのである。この体得の姿勢を通じての情動のトレーニングこそ、我々の求める体と知性を結びつける心づくりであり、究極の生きざまである。「逞しく生きていく」ための必須の条件でなければならない。

逞くましく生きていくための「体得の姿勢」についても猪飼⁴⁾は「それはまさに身体的負荷・身体的労作・身体的感覚を通しての情動脳の興奮がなくては、情動のコントロールはできない」と強調しているのである。ここにおいて体育・スポーツにおける身体教育・身体を通しての教育が、人間教育の現代的価値としてクローズアップされてくることになる。

常日頃我々は感性を働かせ、物事を五感で受け取り、知能や直感で解釈し、自ら感じつつ、自ら想い、自分の行動に志を立て、決断するのであるが、最後の実行に当たって、これを実行するための自己投入が出来ないでいることが如何に多いことか。

やはり猪飼⁴⁾は鈴木大拙師の「心的危機の突破のためには最高時の情緒の興奮がしばしば必要である。」という言葉を用いて、「スポーツはそのような場を与えるものといえる。スポーツは勝敗にこだわるべきではないが、そうしたのっぴきならぬ瞬間の心身共に右にすべきか左にすべきかの判断を下し、その機を失することなく行動するためには情動の強い制御が必要

である。」と述べている。これは前頭葉の高度の活動のためには間脳や大脳変縁系の高度の活動(興奮)を必要とすることを示唆するものである。このことは体育やスポーツトレーニングが、思考に具体性を持たせ、決断実行する人間を育てると言うことに貢献できることを意味している。

筆者は長年の体育やスポーツの指導において、競技レベルや同好レベルの如何を問わず勝敗を競い合う戦いの中には、人間の心身をつきつめたぎりぎりの場面における、「自由と規律」・「権利と義務」・「信頼と友情」などの遂行に伴う情動の徳性が、トレーニングされる機会が数多く存在していることを常に強調し続けてきた⁴⁾。

体育・スポーツは本来「競争と協力」によって理想のゲーム・良いゲーム(ここで言うゲームは球技などのゲームのみでなく、陸上・水泳等の個人の競技をもすべて含む意)を目指さねばならない。

良いゲームは、勝利への意志力としての闘志・体力・幸運と、プレーの芸術としての技術・戦術・公正の6要素を持つべきである。これらの要素を総合的に捉えて、勝利の意志の3要素の流れからは成功への力を、プレーの3要素の流れからは美しさを追求し、両者を合わせて「美しい成功(勝利)」になるよう指導理念を確立しなければならないのである。体育・スポーツは、参加するのみでなく勝利を目指して努力精進する中にこそ、これらの良い要素が表出され、磨かれていくのであることは今更論じる必要もあまい。

しかし現実にはこれら6要素からの正しい勝利への指導や、発育発達に即した遊戯性の尊重などの教育的配慮をおろそかにする、結果志向の言動を悲しみの目で見なければならぬのも事実である。だからといって体育・スポーツにおける競争的場面を、排除するが如き傾向が一部の小学校教育に見られるのも同じく悲しいことなのである。

体育・スポーツにおける本来の競争や協力による競い合いは、「愛しながら闘争」なのである。美しい勝利や、もっと広い意味での、この愛しながらの闘争を否定しては体育・スポーツの価値は無に帰することになる。両者共に今一度ゲームの理想像、良いゲームの中身からの良い選手の育成に向かってその価値の認識と、指導における対象者の全貌を見失なわせない指導方法の検討を望みたいのである。

なお先に述べたこれらの自由と規律・権利と義務・信頼と友情などのトレーニングへの可能性は、健康度や身体的活動レベルの異なる体育・スポーツにおいても共通の課題であり健康体復帰への大切なキーとなるのである。例えば本学スポーツ・健康科学実習のリハ

ビリ体育の指導においても、自己のハンディキャップを克服していく過程で、心身を通しての自己との闘いや、仲間との助け合い励まし合いなどでは、良いゲームの人間教育と言う点で健常者と同じであることを確認するのである^{7,8,9)}。と言うことは、良いゲームからの良い選手の育成の中身は、とりもなおさず、良い少年から良い大人へと運動し、競技レベルや健康度の異なる人々にも共通している指導項目に他ならないと考えてよからう。またこれらの教育の特性は、トレーニングにおける向上の停滞期や困難な状況を迎えた時なども、直接の技術の矯正や、戦術の徹底や、体力向上の運動処方¹⁰⁾の医科学的適応等の云々よりも、本人の人格としての努力や向上意欲が根底となって、奮起する力となることを多くの事例に見る事が出来るのである。

ただ体育やスポーツ活動における体得の姿勢のみが、情動のトレーニングに貢献し得ると言うのではないが、現代の生活においては、このような機会を与え得る場面は、他にはなかなか見つけ出しにくいことに気がつくのである。言いかえるならば体育・スポーツ活動においては、このような情動のトレーニングを体験する場面に巡り会える機会の可能性が他に比べて大であると言えるのではなからうか。

体育・スポーツの時間で、人間の心と体の結びつきや、最高度の集中力を発揮しながらの人間性の魅力を感じ合ったりする中で、お互いの理解と共感が高まり交流が盛んになることは、現在の教育において大変重要である。最近の大学生活においては学生同士の交流の範囲が狭まって行くように感じられる。この意味においても体育・スポーツの時間はこの交流の幅を広げる良い機会であると強調したいし、そのように指導するのも大切であると考えます。

しかしまた体育・スポーツを行えばその全てが「遅く生きていく」ことへの伸展につながると言う保証は何もないのである。今サッカーをこの生きざまになぞらえて考えてみると以下の如くである。

まず1番目のサッカーは、そこに体があり、そこにボールがあるから蹴っとばして走るだけのサッカーである。これは大筋活動に終始しているサッカーに過ぎなく、まさに生きていくだけのサッカーである。2番目のサッカーでは、どうせやるなら、うまくやろうとするサッカーである。敵を抜くにはここはこうして、ゴールを守るにはこうしてと、目的に向かって考え工夫し努力するサッカーである。これはよく生きていこうとする生きざまに通じるサッカーである。しかし体力もあり、いくら走れても、いろいろと工夫をしても、それだけでは何か物足りないものを感じるのである。それは精神的なものに他なるまい。すなわち第1

と第2のサッカーに、さまざまな心の持ち方を加えたサッカーを求めねば、たくましさへの道は遠ざかるに違いない。しかして、この第3のサッカーは、目的に向かっただけの意欲が胸奥深く秘めた闘志となり、困難や苦しさに耐え、成功時の喜びに燃えるサッカーでなければなるまい。それは勝利の感動に友と抱き合い、負けた悔しさに耐えて立ち上がり続ける勇気を育む精神的なサッカーであり、遅く生きていくことへつながるサッカーとなるのである。

このサッカーの例のように、体育・スポーツもやり方次第、指導如何では、いたずらに心のないサイボーグを、夢中になって育てている危険性さえあることに気がつかねばならないのである。このようなことが体育・スポーツに対する中世の「精神と身体分離」の名残も手伝って、「精神不在の身体」などとの批判を呼び起こし、身体教育への根強い不満となっているように思えてならない。

我々が目指す「遅く生きていく」「遅ましく生きよう」とする体育・スポーツにおいては、想像が創造性を育み、知性が知力となり、創意工夫が自らの楽しみを追求して苦しみを越え、喜びを感じ取るようになり、「遅い生き方」と合致してこなければならぬのである。

「遅い」ということ自体についても、筋骨隆々として走り廻れる者のみが遅いのではない。身体的ハンディキャップを背負っていても、自らに敵しく生きる遅しさを(み)につけた多くの学生を先述のリハビリ体育コースに見ることが出来るのである。また少年のスポーツにおいても、例えば近年多い喘息性疾患を持つ子供が、自分の症状を自認しながらも、サッカーゲームの前半なら走れるとか、ソフトボールの3回までならいけると懸命に励む姿などは、遅しさへの芽生えとして深い理解を示さねばならないのである。

このように考えると遅いさとは、自らの状況に応じて常に奮起の姿勢を取り続けることの出来ることであらう。加えるならば特に健康で走り回れる遅い身体の人々は、遅くなればなるほどに優しさの心を持ち、その余裕力を他の人々のために生かしてほしいものである。

第一体育館で練習している本学のバスケットボール部は、上述のリハビリ体育コースの車椅子の学生のため、毎学期毎時間(リハビリ体育コースは全学対象なので水曜日第5限実施)第一体育館2階への運び上げ運び降ろしを汗してくれている。

また昭和49年以来教育学部体育専攻学生や専修学生の中から、毎年2名の学生助手がこのリハビリ体育コースを助けてくれている。これは大学教育の一般弱

者に対する福祉の貧困さを物語ることにもなるが、彼らバスケットボール部員の鍛えた筋力で黙って発揮してくれる心優しさや、いろいろな準備や指導を辛抱強く手助けする学生助手の姿に、筆者や受講生は深く心を打たれるのである。

このようなことは、広川¹⁰がプラトンの教養理念の「節度と勇氣」の項において、「国家」第三巻の中から、「氣概的素質が正しく育まれば勇氣となり、知を愛する素質が育まれば穏やかで端正な性格となるが、それら二つは互いに調和していなければならない」とあるのを紹介し、また続けてプラトンが「音楽・文芸は、知を愛する素質にたいしてはこれを引き締め、氣概的素質にはこれを弛める働きをなし、他方、体育は、知を愛する素質にはこれを弛め、氣概的素質にたいしてはこれを引き締める作用をなす。こうすることによって、知を愛する素質は温和で端正な性格となり、他方氣概的素質は勇氣あるものとなる。調和はまさしく、このようなかたちに正しく育まれた二つの素質の間のみ成立する」とのべていることと意思を同じくするのである。

体育・スポーツはまた知性を軽んじてはならない。体育・スポーツの運動生理学や身体運動力学や健康科学等の知識は体をとおしての技術的知力となり、うまくなる事や速くなる事や強くなる事に生かされねばならない。体育方法やコーチ学からの理論に基づいた想像からの創造性は戦術的知性となり、今後起こり得る事態に対しての予測能力や状況判断力となって行かねばならないのである。一例をあげるならば長い歴史を有するコンチネンタルのサッカーにおいては3B（ブレイン・ボールコントロール・ボディコントロール）が重要視されているが、その3Bのトップに掲げるのはブレインであることの意味を我々は深く吟味しなければならないのである。

今や人生80年時代を迎え、高齢化社会の到来と少子時代の影響もあって、人々はより健康問題に関心を持ちつつある。それは、この生から死に至る生物的区分の間に横たわる長い年月を、如何に自己実現に向かって充実した人生を生きるかと言うことになろう。言い換えるならば、延命医学の進歩や食生活の改善によって80年代に伸びた寿命に、今後は真の意味の「生きる生命」を吹き込むことではあるまいか。そのためには個人の健康と福祉と共に、公共の福祉における人間相互の尊重と理解が必要である。このことは個人の教養と共に集団の教養へと観点を広げるべきであると言うことにもつながるものである。このように考えると到来しようとしている21世紀はまさに健康ボランティアの時代であるといつてよかろう。体育・スポーツは、

心と体のつながりが証明されつつある現代科学とも密接な関係を持ちながら、広い意味での自己実現の健全さと、健康ボランティアに向かっての貢献を重要視しなければならない。

一般の人々の健康問題といえば、運動不足病や成人病しかりである。また健康な人々をより健康にすることも大切である。体育・スポーツがこれらの健康のため、生涯の身体運動のすすめの具体性を見出していくことが今後の必須の条件となる。スポーツ医科学による運動の科学的6原則やトレーニングの3要素などから、人々が置かれている立場に適應する運動処方が、より細かく確立されることが望まれるのである。この運動のすすめについても、人生の自己実現と個人の福祉のためから、社会の健康と福祉にも広がりを見せるような、健康な身体と心づくりのすすめであることを強調したいのである¹¹。

すなわち体育・スポーツは体と心・知性と心と心とが密接に結びつくことを理想とする知育・徳育・体育による三位一体の教育の視点からの健全な人格の確立を目指すべきである。この三位一体の教育における体育・スポーツは言うなれば、人間の足元から心に昇り迫って行く道徳的教育でなければならないのである。

このように考えてみると体育・スポーツに求められるものは、最終的には「逞しく生きていく」という人間の生きざまに添う精神力を重視したところの、「鍛えられたエネルギー」を持った実行力を「み」につけると言うことになろう。人間は社会的動物であると言われる如く多くの仲間と一緒に生きていかなければならないし、時としては一人で大勢の人の対峙しなければならない時もある。共に生きて共に目的に向かうためには、チームワークが必要である。

「チームワーク」とは何かと学生に訊ねてみるが、「協力する心」以外に満足な答はなかなか得られない。協力をする心はチームワークのスタートではあるが具現性がない。この協力を可能にする技術や体力のレベルに到達する、努力や助け合いや励まし合いが必要である。更にそれらを生かして勝利するために、試合時間や回数の流れにおける場への適應の洞察力が不可欠な要素である。現代のスポーツのプレーシステムの特徴は、システムの裏にある流動性であり、場に應じた判断力や予測能力は創造性のある個性の育成につながるものである。チームワークのこのような理解や体験は、体育・スポーツのみならず現代生活全体に必要なことを常に強調してきた¹²。更には一人でリーダーシップを発揮し、他の人々を結集させリードできる能力も必要なのである。リーダーは事に当たって自信と微笑みに満ち、勇氣ある決断と行動を取れること

がその資格である。

このように大勢の仲間や集団の成員として役割分担責任や、リーダーとして困難を克服する闘いから、鍛練されたエネルギーを「み」につけることが出来るのである。体育・スポーツのトレーニングにおいては、先に述べた如く、このような場面に巡り合う多くの機会に恵まれている。この機会を確実に捉えて行く指導者の資質としての能力を高め・人格を磨き・知識を深め練磨することもまた肝要であろう。

以上述べてきた体育・スポーツの良い中身が「行動する知性」として常に前進するためには、その体験が自分がこれを為すことによって開けるだろうという「効力感」に裏打ちされていることが大切である。稲垣¹³⁾は、「努力すれば、あるいは行動すれば、環境に変化をもたらすことが出来るという見通しと、それに伴う感情（自信）を「効力感」と呼ぶことにしよう。別の言い方をすれば、効力感とは、自分が有能であるという感じ、ないしは自己への信頼とも言える。結果に対して不確かさの伴う場面で積極的に新しい行動を始めるには、この効力感を持っていることが重要である。」と述べて、新しい事態に取り組む要因を見事に捉えている。遅い生きざまのために「体得の姿勢」を通して、本来の展望に対する気概に満ちた勇気を培い、この「効力感」を積み重ねることこそ肝要である。

「体得の姿勢」を通じて「効力感」を積み重ねること、それこそはまさに、「為すことによって、為すことを学ぶ」と言う体育・スポーツの根源的姿勢から始まるものである。

かくして、体育・スポーツは、さまざまな人生を遅く生きていく人間教育に貢献し得ると言う、教育的価値の評価を高め、その存在価値が認識されるに違いないと考えるのである。

Ⅲ. 体育・スポーツにおける、楽しくーうまくー遅しさへの道

スポーツは楽しく・うまく・遅くの道をたどって上達して行ってほしいと思っている。それは少年スポーツから大人への道においても、各年代を問わず初心者から熟練者への道においても、その活動志向レベルが異なっても同じである。

筆者は我が国の少年サッカーの指導育成に当たって、昭和42年「楽しさ」と「厳しさ」を少年にも指導者にも提唱してスタートした¹⁴⁾。以後、全国サッカースポーツ少年団大会10年・全日本少年サッカー大会20年の計30年間、毎年の大会の指導部の責任者として、

良い選手の土台として生活の自立を重視し、良い戦いの充実に努力した。またこの間全国各地に派遣されて、少年選手と指導者の育成を続けてきた¹⁵⁾。

6ヶ年の東京大学助手時代の虚弱者グループの体育指導の経験を生かして¹⁶⁾¹⁷⁾、昭和49年本学正課としてリハビリ体育コースを設立した。ここでは各自の疾病や障害に対して深い理解はするが同情はしないという立場で、「優しさ」と「励まし」から心遣しさをねらいとした。平成6年までの21年間の本コースの受講学生は延人数982人、実人員795人であり、学期平均人数23人強であった。受講学生は各自のハンディキャップに応じて、健康体復帰を目指し健気によく努力した¹⁸⁾¹⁹⁾。

昭和34年以来の大学正課体育理論及び実技では知的理解からの「うまさ」と「遅しさ」を強調し、将来の遅い生きざまについて心と体の鍛練を強調してきた。

また昭和48年から課外の本学サッカー部活動においては、「耐える闘志で、燃える青春」の合言葉を掲げ、他大学に比べての体験の不足を、知的理解からの厳しい練習効率でカバーすることをねらった。課外のスポーツは競技レベルでの勝利を目指して努力精進し、真に遅い生きざまに貢献すべきである。学生が専門の学問をするのは当たり前である。その上に青春をかけて何ができたかとの両立に厳しく対応させた。その結果は24年間で四国代表として全日本学生サッカー選手権大会3回・内閣総理大臣杯全日本学生サッカートーナメント大会7回出場の記録を残した¹⁸⁾。

同じく昭和49年同好会からスタートしたスキー部では、「南国から雪山のロマン」を合言葉としロマンの裏打ちとしての努力を求めた。学生は平素の陸上トレーニングに懸命に取り組み、冬山・春山は勿論、遠くの夏の雪渓にも挑む活動ぶりを見せた。仲間の怪我や事故時にみせた手早い対応や友情の深さに感銘した。

なおまた、県内の各種団体や各地の一般の人々の健康のため、運動のすすめや、生涯スポーツについても、楽しさの時間づくりから出発して継続の力となるよう強調し励ましてきた¹¹⁾。

これら長年の指導を通じて、各々の体育・スポーツの対象者やレベルは異なっても目的への道としては、これらの楽しさや厳しさ、うまくなる工夫や努力、最終的には克己からの遅しさへと、その中身は共通的であるとの見解を得るに至った。

そこで、この過程を楽しさ・うまさ・たくましさの3項目に絞り、数年前から、「楽しくーうまくー遅しく」と言う一連の道として表現し指導提唱してきた。

このようなことから今回、この3項目と一連の道に

ついて、今日までの筆者の指導理論や実践の体験から感じた取った、必要要素を取り上げて構成図を創り、その中身の理論的構築を試みようとするものである。

1. 楽しさの構成図

楽しさを醸し出す構成要素として、苦しさ喜び・自由と規律を取り上げ、各要素間を回路として表したものが図1である。

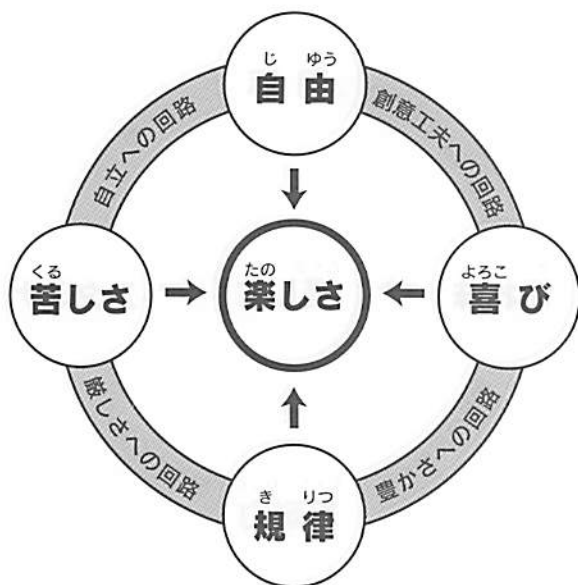


図1

楽しいことは楽なことではない。苦しみと喜びを伴ってこそ、本当の楽しさと言えるのである。楽しさには自由と規律が必要である。特に体育・スポーツの楽しさには規律を自然に(み)につけた自由さが必要なのではあるまいか¹⁹⁾。

楽しさを核としての苦しさと自由をつなぐ回路は、「自立への回路」とし、自由と喜びをつなぐ回路は、「創意工夫への回路」とし、喜びと規律の回路は、「豊かさへの回路」とし、規律と苦しさをつなぐ回路は、「厳しさへの回路」とした。

さてスポーツをすることの第一条件は、「楽しさ」でなければならない。それは楽しさは、「大脳への目覚めの信号」を送るからである。このことへの理解は、特に少年スポーツと初心者指導や、リハビリ体育において最も重要である。日々の練習において、初めは「苦しくもないがきつくない」レベルを楽しみながら、徐々に苦しさが増えながら「きつく」なっていくのである。苦しさは練習において、このような主観的強度の区分を自覚しながら運動強度を上げていくことになるのである。主観的強度はまだ楽な段階からの小さな成功の喜びの積み重ねが、やがて大きな苦しみにも打ち勝って、大きな喜びに達

するのであることに気がつくのである。

体育・スポーツは、まったくの個人でなし得ることは皆無に近いといってよいだろう。良い人間関係には、必ず規律が必要であることは今更論ずることもなかろう。

河合²⁰⁾は「そこに真の創造性が生まれるためには、その自由に何らかの枠組みがなければならないということもまた事実である。まったくの自由というのは、人間にとって「自由」の意味を持たないようである。」と述べている。このことは体育・スポーツにおける自由な時間と空間を、如何に創造的に効率のよく使い切るかというテーマをも含みながら、また集団における自由と規律からの良い人間関係づくり取って、大変大切な示唆となろう。

2. うまさの構成図

うまさの構成要素として、正確さとスピードを横軸にとり、巧みさと注意力を縦軸において各要素間を回路として表したものが図2である。

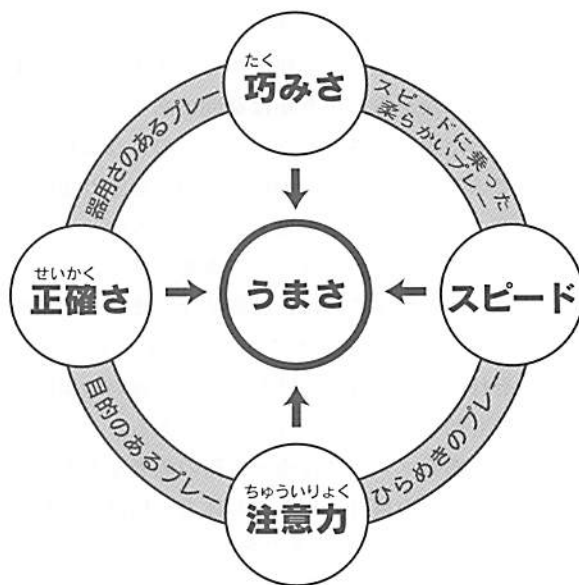


図2

うまさには、正確さと速さが必要である。速さはあっても、不正確ではうまさがあると言えない。正確であるけれどもあるレベル以下のスピードでは通用しないことがある。うまさには、うまくなるための注意力の集中と、巧みな身のこなしが不可欠である。

うまさを核としての正確さと巧みさをつなぐ回路でのプレーは、「器用さのあるプレー」となり、巧みさとスピードをつなぐ回路のプレーは、「スピードに乗った柔らかいプレー」となり、スピードと注意

力をつなぐ回路のプレーは、「ひらめきのプレー」となり、注意力と正確さをつなぐ回路は、「目的のあるプレー」となるのであろう。このように「うまさ」は四つの回路のプレーを吸収して上達することを理想としたい。

もともと「うまさ」は、正確さー速さー強さを良いタイミングで統一することであると考えているのである²¹⁾。いまひとつは器用さの三要素（どのくらいの力でーどこに力を入れてどこを力抜いてーそして何時）からの観点の方法である²²⁾。

このような考え方からすると、上記のうまさの四大要素には強さが取りあげなければならないだろう。しかし筆者は、「うまさ」に向かう過程における強さとは、巧みさと正確さにおける力のコントロールそのものを狙いとすべきであると考えている。その考えを強調するが故に、強さを器用さのあるプレーの一要素としたものである。

なお、うまくなるための技術的ヒントの獲得のための方法として、小林²³⁾のいう動作焦点・意識焦点・心理的中心の具体例の研究も大切である。

体の柔らかさは、巧みさの躰にとって大切な要素である。体力測定の前屈度そのままプレーの柔らかさにつながるかどうかは疑問であろう。スピードにのった柔らかさとしたのは、このような意味を含んでいる。特に捻りの動作や、相手をすり抜ける半身のプレーや、相手を欺くための半歩のリズムなどは、今後の研究テーマとして重要である。

スポーツのうまさには、技術的なうまさと戦術的なうまさと、両者のうまさがかみ合わねばならない。それは自分の身につけた技術を、戦いの場において最も効率良く使いこなすことである。

目的のあるプレーは技術と戦術の両者を含み、その達成のための裏打ちとしての体力や精神力が必要となるのである。ひらめきのあるプレーは、戦術における神経感覚的意味を強調したものである。四方八方への感覚は、五官による五感によって鋭さを増し、ことにあたって五感が総合されて一瞬のひらめきとなるのである。このようなことから、筆者は第六感のことを「ひらめきの第六感」と名付け、そのトレーニングは神経感覚的トレーニングと名付けた^{24,29,33)}。

また、うまさの上達は、この項のみでなく、上述の楽しさの中身の上に積み重なって向上するのであって、工夫や努力の因子は、生き続けていることを忘れてはならないのである。更に、楽しいからよりうまくなり、うまくなったのでなお楽しいということも、運動の指導段階においてはよく語られることである。

このように考えると、うまさと楽しさは相乗的・相補完的に向上するものであるとも言えよう。

3. 遅しさの構成図

遅しさの構成要素として、切れ味とスタミナ・闘志と忍耐力を縦横に配し、各要素間を回路として表したのが図3である。

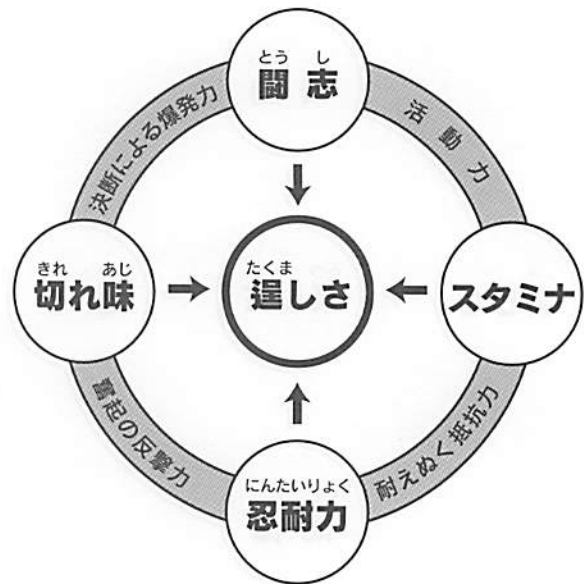


図3

遅しさには一刀両断の切れ味と、走り続けることのできるスタミナが必要である。出来れば高い持久力の上に立った、切れ味であり敵しさであって欲しいのである。闘志は燃える闘志と耐え抜く忍耐力が必要である。一般的には燃えて攻め、耐えて守ると考えがちであるが、耐えて攻め、燃えて守るという攻守の発想の逆転も考えられてよかるう。

遅しさを核としての、切れ味と闘志をつなぐ回路は、「決断による爆発力」となり、闘志とスタミナをつなぐ回路は、「活動力」となり、スタミナと忍耐力をつなぐ回路は、「耐え抜く抵抗力」となり、忍耐力と切れ味の回路は、「奮起の反撃力」となるのである。このように遅しさは、4つの回路に根ざした人間力として「決断への勇気」、「へこたれないスタミナ」、「弱音を吐かない抵抗力」、「最も苦しい時の奮起の姿勢」などを身につけてより遅しくなろうとするのである。

このように考えると遅しさには、相手を打ち続ける強さや激しさと、相手の強打や激しさの連続に耐え続けるしぶとさの両面を合わせ持たねばならないのである。

更に、遅しさには、スタミナのような体力的側面

と切れ味といわれるごとき技術的側面と共に、燃える闘志と耐える闘志に代表されるメンタルパワーとの総合力であることがわかるのである。

そして忘れてならないのは真に逞しくなると言うことは人間的「優しさ」を、兼ね備えていくことに他ならないと言うことができよう。自分が苦しくてもなお友のためサポートに走り寄る心、それこそ人間的な優しさを持った勇氣である。筆者はこの逞しさの育成にあたり、「スムーズな動員とタイムリーな消耗」を旨としながら、「最も苦しい時こそ最も勇氣を出せ」との励ましを常としてきた²⁴⁾。

4. 楽しく—うまく—逞しくの総合的検討

楽しく・うまく・逞しくについて、その各々の全体像と構成要素について論及してきた。しかし、体育・スポーツの実際の練習や試合の場面では、この楽しさから逞しさへの中身が一連の流れとして捉えられなければならない。3項目が生き生きと息づきながら一連の流れとなり、全体の流れとしてレベルアップに向かって行くことが理想である。(図4)

また少年から大人へ、初心者から熟練者への道において、それぞれの年代や経験の度合いによって、全体的な捉え方からの強調項目が異なることはあるだろう。しかし、例えば少年は楽しければそれで良いのではなく、少年なりに、楽しく・うまく・逞しくの3項目の中身が、常に運動して磨かれ向上することが最も望ましいのである。同じように、リハビリ体育においても、自分の疾病や障害に応じての運動処方、生活の中で楽しみつつ継続する中で、うまくなり健康体の復帰にむかって心逞しくなっていくことが必要である。

実際の活動場面では、その時々々の練習や試合や活動によっては、楽しさが特に強調されたり、うまさ

気の限界までトレーニングが続くこともあるだろう。

これらのことを含みながら、体育・スポーツにおける、学ぶものと教えるものとの指導支援や協力によって自立への段階を上って行くのである。

自立への段階はまず「馴れ親しむ」ことから始まる。

それは、目的に沿ったいろいろの活動やねらいに早く馴れ親しむことことが大切である。馴れるためには一時期そのことに夢中になることがよくある。夢中になるとはそのことに没頭することである。但し、この無我夢中の没頭振りが少年スポーツや学生スポーツにおける、勉学との両立や生活との調和で問題視されがちなことから、体育・スポーツ指導におけるトータルライフを踏まえた指導の必要性を筆者が強調し続けてきた^{4,5,24)}。しかし、スポーツに限らずあらゆる分野において、好きで楽しくなり、さらにはうまくと目的が出てくる頃、周りが見えなくなるくらい夢中にならねば上達が望めないのも事実であることを、多くの人は知っているのである。

その解決策は、本人の行動に常に関心を持ち、暖かく、理解深く、見守る環境が必要である。その環境とは、スポーツの指導者と両親と学校の教師であり、この3者が協力して育てるという意味で、筆者は早くから「三者協育」を提唱してきたのである^{4,5,26,27,28)}。このことは第15期中央教育審議会答申でも、今後における教育の在り方の中で、「生きる力」を強調し、学校と家庭と地域社会の役割と連携が多角的に論じられているが、やや逞きに失した感をいなめないのである。筆者の「三者協育」は直接的には我が国の少年サッカー指導育成体験からの提言であるが、種目にかかわる問題ではなく、全ての少年スポーツに、いや全ての人間教育に同じことが考えられるのである。

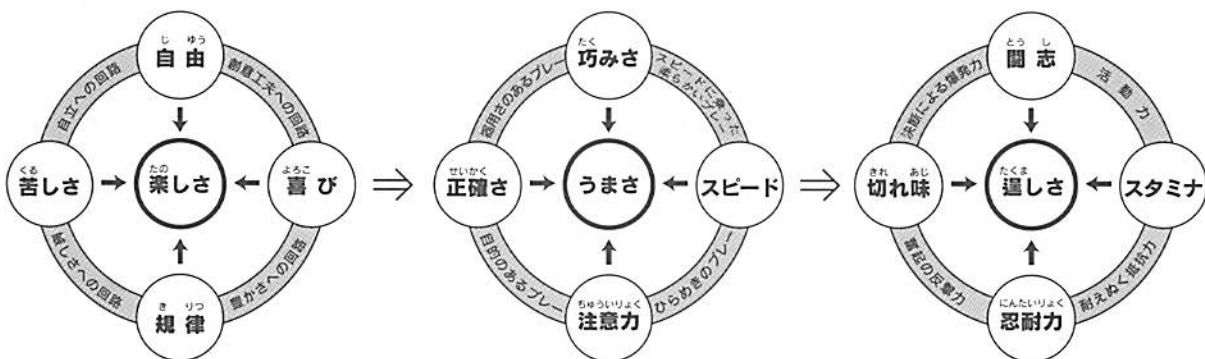


図4

馴れ親しみの次には、自分の無我夢中振りに気がつき始めるようになり「分かり納得する」段階になる。

「分かり納得する」とは、「ああそうか分かった」と言うことであり、自分との間に間をおいて観ることが出来るようになることである。そのスポーツや練習の方法や試合における自分の立場が、理解できるようになったということであろう。またスポーツにおける味方との協力プレーや、敵も同じく協力して攻めてくることが理解される段階になったことである。それは試合における攻める・守る方法や手段の必要性に気づき、そのために「使いたい技術や戦術」を自覚し始める時期でもある。しかし体育・スポーツにおける難しさは、分かったことがすぐ出来るとは限らないことである。

そこで次に「求めてみにつける」段階にすすんで来るのである。

ここで大切なことは先に述べた「できる」と「できない」を左右することとして、自ら求める技術や戦術かどうかと言うことである。自ら求めるものは「み」につき易く、教えられるからやるものは、なかなか「み」につきにくいように考えられるのである。またこの段階での「求めてみにつける」としたのは、馴れ親しみ－わかり納得する段階を経てきたものは、自ら求めて工夫と努力を積み重ねてほしいと願うからである。それはまた最終的なねらいである自立のための、使いたい技術や戦術・覚えたい技術や戦術に向かう意識的行動への芽生えであり、自立の始まりの時期として見逃せない段階であると言えよう。その意味では、「自ら求めて、みにつけはじめる」段階といった方が的を射ているようにも思われるのである。

次いで「使いこなせる」段階に進んで来ることが望まれる。

ここでは、楽しさやうまさへの実感が「味の素」となり、さらに自らに課題を課すようになってくる。即ち「使いたいもの」として、自ら「求めてみにつけはじめた」技術や戦術が（み）について、「使える技術」になってきたことである。それはまた、戦況に応じて、「使い分けれる」ようになることを意味し、更に目的の成功に向かって「使いこなせる」ようになることである。

慣れ親しむ－わかり納得する－求めてみにつける、段階を経て「使いこなせる」ようになったと言うことは、技術や戦術にまわりついている理論的知識をも縦横に駆使出来るようになったことである。即ち技術的知性・戦術的知性を発揮できるよう

になったことであると言ってよからう。

サッカーのボールコントロールの技術を、筆者の指導例²⁹によって、ボールに馴れ親しむ段階から使いこなせる段階までの道程を挙げてみると、以下の如くである。

「その場で余り動かないでボールコントロール・だんだん動く範囲とスピードを上げて・まだあまり邪魔をしない約束の相手を入れて・対等に戦う相手を入れて・練習試合の中で使えるか試してみる・試合の目的のプレーに使ってみる・そして使えるようになり」の順序を積み重ねてようやく「使いこなせる」ようになっていくのである。そのときに技術を使うための戦術の3原則である「回りを見る－敵より速くにボールによる一パスしたら次のスペースへ走る」などの、戦術的知性に根ざした動きが各段階なりにオブラートされていることが「使いこなせる」ことの条件なのである。

我が国の体育・スポーツでは、従来ともすると分析的技術を積み重ねて、やっとなゲームといった技術主導の指導方法が取られてきた傾向が強い。しかし、どう攻めるか・どう守りたいのか、そのためにはどんな技術や戦術が必要なのかが体育・スポーツの創造性にとって大切である。言うなれば技術と戦術は表裏一体関係であることを理解しなければならない^{29,30}。

このように練磨し続けてきた最終段階は、「そして自分で創る」ことである。

自分で創るとは、自立してそのスポーツを楽しむ・励み・鍛えることが出来るようになることである。すなわち創造的自立が出来ることであろう。創造性とは言うは易く発揮するは一朝一夕にできるものではない。「そして」の意味はこのことを指している。すなわち馴れ親しむころから、それぞれの段階に応じての小さな工夫や努力から、ねらいの成功に向けての想像と行動がやがて創造性の芽生えとなり、俗にいうアイデアのあるプレーを発揮することになる。

個人能力の開発としても、チーム力の向上としても、創造性が進展するためには、野村ら³⁰の言う、ある高さの目的・一心に努力する姿・出来れば素晴らしい結果の三条件が必要である。体育・スポーツに限ったことではないが、目的には主情性・自発性・社会性が、努力には全人格性・困難性・実現性が、結果には能力の開発仕事の共同性・連帯感が必要である。このことを肝に銘じねば、「そして自分で創る」への道は遠ざかり、長い練磨の日々は流れた日々に過ぎなくなり、実りの少ない結果を嘆くこ

とになろう。

体育・スポーツのトレーニングでは、「教わる技術」も大切であるが、教わるのみでは創造性が育たない・教わることを手ほどきを受けると考え、その手ほどきのヒントから自らの「求める技術」がわかっていくことこそ理想である。「求める技術」は自ら練習し、うまく行かない時・うまく出来ないところをこそ、「教わる」ようにすることが「身につける」ための最も望ましい態度といえよう。

しかしすべて自分でやるといっても、体育・スポーツのよってきたる大前提であるスキルアクトの向上は、他の人に観てもらわないとわからない部分が多いのも事実である。その意味からは良い指導者につくと言うのも大切になろう。

このように論をすすめると、最後は有能な指導者の必要性に行き着くのである。ということは、楽しく—うまく—遅くへの道を進むには、そこに誘ってくれる指導者が必要なのである。

我が国の体育・スポーツの指導者育成制度も、漸く真剣に検討が進められる時代になりつつあることは喜ばしいことである。また、指導者養成制度の中では、ある競技の技術や戦術に秀でていたり、ある権威付けのみであってはならないと強調している。

しかし、前項の「生きざまと体育・スポーツ」で述べた如く、まだまだ権威を振りかざし、少年や初心者に対して、サイバネクス論的体力の重要性を解せずして、エネルギー論的体力からの、それ行け・頑張れ・またミスかと大声で怒鳴るのを悲しい思いで見聞きしなければならないのである³⁰。

創造性育成のためには、積極的ミスは褒めこそすれ、叱らない約束をして欲しいものである。また挑戦して失敗した者、悩み沈みがちの者などに対する、勇気づけを忘れないで欲しいのである。すなわち体育・スポーツの指導者は、指導を受ける側への細やかな教育的配慮と、活動場面における伝達の技術を兼ね備え、トータルな人格としての指導が特に強調されるのである³¹。

ここで論じて来たような楽しく—うまく—遅く各項目をより深く検討し、全体の流れの中身を総合的に捉え、教わる者の立場を理解し、良い教え方良い学び方を常に探究する指導者でなくてはならないと考えるのである。

IV. 終わりに

体育・スポーツの存在価値を探るため、まず、生き

ざまと体育・スポーツについて論及した。次いでその体育・スポーツの活動における目的への道として「楽しく—うまく—遅く」の構成図を創り、その中身について検討した。またその遅しさに誘う指導者の必要性を痛感した。

生きざまとスポーツにおいては、大脳生理学に基づく遅い生き方としての第三の生きざまを目指し、体得の姿勢を積み重ねるべきである。体育・スポーツはこの体験に巡り合う多くの機会を持つ可能性が他に比べて大であり、その中で自由と規律・権利と義務・信頼と友情・競争と協力などの人間の情動が磨かれる可能性が高いと言えるのである。

体育・スポーツは、この体得の姿勢を通じて鍛えられた、意志のエネルギーに裏打ちされた実行から、未来への展望に対する効力感を積み重ねて、さまざまな生きざまに貢献し得ると考えられる。特に現在の教育にとって、重要視されつつある自己実現や全人教育に貢献するところ大であると主張できるのである。

このような体育・スポーツを行うためには、楽しく—うまく—遅くへの道づくりが大切である。楽しさ・うまさ・遅しさ各々の中味もそれぞれに体育・スポーツのねらいとして独立的に意味を持っているが、どの段階においても、常にその基盤としての3項目を含んだ一連の流れとして捉えることが肝要である。またこの一連の流れを練磨して行く段階としては、「馴れ親しむ—分かり納得する—求めてみにつける—使いこなす—そして創る」と言うステップを、自ら工夫と努力で伸展させていく心掛けが大切である。

遅い生きざまに貢献するための体育・スポーツを知育・徳育・体育による三位一体の教育理念から捉へ、その遅しさへの道へ、誘う指導者が必要である。指導者は人間的徳性に富み、流動的知性に優れ、教育的配慮と伝達の技術を探究して、常に良い教え方良い学び方を実践すべきである。

なおまた21世紀に向かっての高齢化と少子社会を、健康で自己実現に向える、遅い生きざまを提供できる体育・スポーツの具体性を研究し続ける必要がある。

かくして今後とも、体育・スポーツは人間教育のひとつの柱として、その存在価値が評価され続けるに違いないと考えられるのである。

参考文献

- 1) 田中純二(1994) 本学改革から体育の在り方を考える. 体育学研究39(1): pp.55-59.
- 2) 猪飼道夫(1968) 身体活動の人間形成に及ぼす影響. 文部時報: No1091(6). pp. 2-10.

- 3) 増山英太郎 (1989) 感性はどうしたら磨けるか. ごま書房: 東京, pp.40-44.
- 4) 田中純二 (1977-1996) 少年選手諸君へ. 父母のご理解とご協力を. 全日本少年サッカー大会プログラム, 第1回大会-第20回大会用. 日本サッカー協会. 日本スポーツ少年団. 読売新聞社: 毎回2p
- 5) 田中純二 (1977) 良い選手になるために. 全日本少年サッカー大会用サッカーハンドブック. 日本サッカー協会: 毎回2p
- 6) 田中純二 (1976) サッカーの GOOD GAME 試論. 松山商大論集27(4): pp.63-96.
- 7) 田中純二 (1975) 本学一般体育実技におけるリハビリテーション・コースの指導に関する研究. 愛媛大学教養紀要8: pp.309-343.
- 8) 田中純二 (1985) 本学におけるリハビリテーション・コースの指導に関する研究(Ⅱ)-特に8ヶ年の推移から-. 保健体育学論集-藤原元晴教授退職記念-愛媛大学教養部保健体育研究室: pp.11-21.
- 9) 田中純二 (1995) 本学一般体育実技におけるリハビリテーション・コースの指導に関する研究(Ⅲ)-21ヶ年の推移と実態-愛媛大学教養部紀要28: pp.31-48.
- 10) 広川洋一 (1990) ギリシャ人の教育-教養とはなにか-. 岩波新書: 東京, pp.100-101.
- 11) 田中純二 (1992) すこやかにすごすために一生懸命スポーツ. 第39回通俗医学講座. 松山医師会報No.146: pp.57-66.
- 12) 田中純二 (1981) リーダーとしての条件. 体育系サークルリーダー研修会報告書. 愛媛大学: pp.5-11.
- 13) 稲垣佳代子 (1981) 効力感の利用. 波多野誼余夫編. 自己学習能力を育てる. 東京大学出版界: 東京, pp.66-94.
- 14) 田中純二 (1967) 少年サッカーの指導(連載). 日本サッカー協会機関紙. JFA NEWS: No.66-70.
- 15) 田中純二 (1991) 17年目を迎えて1,000人が受講. 少年サッカー指導者講習会報告. 日本サッカー協会機関紙-JFA NEWS No.81: pp.82-94.
- 16) 田中純二 (1962) 虚弱者の運動処方. 体育の科学. 12(7): pp.329-332.
- 17) 田中純二 (1963) 虚弱者の体育指導. 保健の科学. 5(10): pp.410-413.
- 18) 愛媛県サッカー協会 (1988) 愛媛県サッカーのあゆみ. 愛媛県サッカー協会: pp.369-379.
- 19) 池田 潔 (1949) 自由と規律. 岩波新書: 東京, pp.48-157.
- 20) 河合準雄 (1992) 子どもと学校. Ⅲ, 教える側, 教わる側(体育と笛) 岩波新書: 東京, pp.118-131.
- 21) 田中純二 (1969) 図解サッカーの教室, 特活シリーズ. 北隆館: 東京, pp.21-38.
- 22) 猪飼道夫 (1975) 日本人の体力-心とからだのトレーニング 日経新書: 東京, pp.115-126.
- 23) 小林一敏 (1971) 身体運動のコントロール, スポーツ科学講座・スポーツとキネシオロジー大修館: 東京, pp.106-108.
- 24) 田中純二 (1980) 子供の遊びスポーツ百科. 3・ボールゲーム編大修館: 東京, pp.275-282.
- 25) 田中純二 (1983) スポーツ科学の適用を考える-コーチ学的見解に立って-昭和58年度愛媛県体育協会スポーツ科学研究報告書: pp.15-17.
- 26) 田中純二 (1993) 我国少年サッカーの指導に関する研究-特に良い選手像について-. 愛媛大学教養部紀要26: pp.47-67.
- 27) 田中純二 (1981-1982) 連載, コーチと両親のための少年サッカー指導論-教育的配慮と伝達の技術-. サッカーダイジェスト.
- 28) 田中純二・大沢英雄 (1989) コーチと両親のための少年サッカー-指導13章と戦術感覚入門-梓出版: 千葉, pp.1-90.
- 29) 田中純二 (1971) 伸びる芽の見つけ方・ボールコントロール. 学校体育(特集・学校体育とスポーツ教室) 24(10): pp.77-81.
- 30) 田中純二 (1983) 子どもが戦術・戦法から学ぶもの. 体育科教育31(4): pp.71-73.
- 31) 野村健二・恩田彰編 (1971) 動機づけからみた創造性, 講座・創造性の教育Ⅰ・創造性の基礎理論 明治図書: 東京, pp.130-146.
- 32) 田中純二 (1987) 体育指導, コーチの側からみた問題点. 臨床スポーツ医学4(7): pp.779-784.
- 33) 田中純二 (1976) 我国少年サッカー指導者育成試論-特に教育的配慮と伝達技術の諸問題について-愛媛大学教養部紀要11: pp.273-298.